障害と身体をめぐる旅2022

令和４年度 神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター 報告書

（ 運営 ： 認定NPO法人　ＳＴスポット横浜 ）

令和
4年度

神奈川県
障がい者
芸術文化活動
支援センター

ごあいさつ

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターは、令和２年４月から活動を開始しました。

運営団体であるＳＴスポット横浜は、神奈川県横浜市にあるＮＰＯです。
「アートの持つ力を現代社会に活かすこと」をミッションに、小劇場「ＳＴスポット」を運営する芸術機関として1987年に活動を開始しました。2004年からは地域コミュニティに向けた活動を担う、地域連携事業部を設置し、学校での芸術家による授業の実施や、地域の文化団体支援などを行っています。

福祉分野における活動は、2015年から開始しました。文化庁による助成や神奈川県との協働事業を通し、地域に暮らす障がい者が芸術文化活動を通して生活の質を向上させ、社会の中で顕在化することで、障がいの有無にかかわらず共生する社会の実現に向けた基盤整備の一翼を担うことを目指した活動を続けています。

今年度は「やりたいと思った人が自分たちで活動を続けること」をサポートすることを目指し、大きく3つの視点を持って、事業の組み立てを行ってきました。

1つ目は地域資源の活用です。文化施設や社会教育施設など地域にある資源を活用した事業展開を行ってきました。
2つ目は関係機関への働きかけです。今後の連携につなげられるよう、各自治体の障害福祉課や文化課、文化施設等関係する機関に対してヒアリングを行なったり、支援センター事業周知に努めました。
3つ目は調査研究です。神奈川県内の障害福祉サービス事業所に対してアンケート調査を行い、現状把握をしました。調査の結果は、みなさんに活用しやすいかたちで共有をしたいと思っています。

本年もさまざまな風景、表現と出会いました。この冊子では、旅の様子の一端をみなさまにお伝えいたします。

目次

04　神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターについて

〈 つなぐ 〉

06　相談対応内容

07　情報収集・発信／座談会「文化施設のみなさんと考える障がいのあれこれ」

08　協力委員会

09　「神奈川県内福祉施設への芸術文化活動に関するアンケート調査」結果

〈 つくる 〉

16　飛行船×上村なおか（ダンサー・振付家）
—「そのままの身体に出会う」

18　くれよん×北川結（ダンサー・振付家・イラストレーター）
—「からだを使って遊ぶ」

20　きたのば×西井夕紀子（作曲家）
—「きもちを音にのせて」

22　スプラウト×尾引浩志（音楽家）
—「音に会いに出かける」

24　ぱれっと・はだの×原田曉（美術家）
—「自然にふれるものづくり」

26　第３けやき×金子愛帆（フォトグラファー・ダンサー）
—「それぞれの世界を写す」

28　リエゾン笠間×中村大地（作家・演出家）
—「ひとりの物語に耳をかたむける」

〈 支える 〉

30　勉強会　第１回「福祉施設での表現活動を豊かにするために」

32　勉強会　第２回「生まれてきた表現をみんなに見てもらうには」

33　勉強会　第３回「ものづくりの楽しみ方を体験する」

34　報告会　地域とともに考える障がい福祉と芸術文化

36　今年度の事業を振り返って

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターとは

神奈川県内の障がいのある人が身近な地域で文化芸術に触れられるように、
障がい福祉・芸術文化のネットワーク構築を目指し、令和2年度4月に開設しました。
「つなぐ」「つくる」「支える」の3つを柱に、活動を展開しています。

つなぐ

障がいのある人の芸術文化活動に関する相談を受け、適切な情報につなぎます
また、障がい福祉・芸術文化の枠を超えたネットワークを構築します

今年度の取組みは
→P.05～

つくる

芸術家によるワークショップ等を実施し、障がいのある人が芸術文化活動を体験・発表できる機会をつくります

今年度の取組みは
→P.15～

支える

講座等を開催し、障がいのある人の芸術文化活動を支援する人を支えます

今年度の取組みは
→P.29 ～

厚生労働省「障害者芸術文化活動普及支援事業」について

障がいのある人が芸術文化を享受し、多様な芸術文化活動を行うことができるように、地域における支援体制を全国に展開し、障がいのある人の芸術文化活動の振興を図るとともに、自立と社会参加を促進することをねらいとした事業です。2017（平成29）年度から実施しています。
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/shougaishahukushi/bunka.html

厚生労働省
ウェブサイト

つなぐ

ここでは、障がいのある人の芸術文化活動に関する情報をつないだり、県内のネットワーク構築に取組んだ活動をご紹介します。パンフレットで相談窓口の周知し、障がいのある人の芸術文化活動に関する相談や問い合わせが多く寄せられました。またウェブサイトでは県内の公募・イベント情報などを発信しました。また、県内の文化施設・団体のみなさんといっしょに障がいのある人にとっての文化施設のあり方について、いっしょに考える機会を作りました。今年度は県内の福祉施設に対して、芸術文化活動の状況をうかがうアンケート調査を行いました。障がい福祉、芸術文化の枠を超えたネットワーク構築を目指します。

- 相談支援
- 情報収集・発信
- 文化施設のみなさんとのオンライン座談会
- 協力委員会

相談対応内容

障がい者やそのご家族、障害福祉サービス事業者等から芸術文化活動に関する相談を受け付けました。対応件数は79件でした。（2023年2月28日時点）

相談件数の内訳

❶相談者属性

合計：79件

障がい当事者	33
障がい当事者の家族	4
障害福祉関係者	13
芸術家・文化団体・文化関係者	8
文化施設	6
市民団体	1
自治体・他支援センター	4
その他	10

❷相談方法

合計：79件

面会	6
電話	42
メール	25
オンライン	2
問い合わせフォーム	2
その他	1

❸居住地別

合計：79件

横浜	23
川崎	12
相模原	7
横須賀・三浦	0
湘南東部	5
湘南西部	6
県西	12
県外	7
不明	5

❹相談内容

合計：79件

鑑賞の機会	8
創造の機会	11
発表の機会	25
交流・連携	8
調査研究・保存	0
権利保護	4
人材育成	1
情報発信	14
その他	8

相談内容の詳細

- 鑑賞について……文化施設が主催するコンサートに手話通訳をつけたい。音楽に専門性を持った通訳を紹介してほしい。
- 創造について……グループホームで生活しており、土日の余暇としてアート活動に取り組みたい。
- 発表について……自分が描いている絵をいろんな人に見てほしい。
- 交流・連携について…コミュニティセンターの貸し館を利用している団体に、支援センターの取組みを紹介したいので資料がほしい。
- 権利保護について……福祉施設で行う展示で作品を販売したい。契約など、どのような手続きが必要か。
- 人材育成について……障がいのある人を対象としたダンス講座を行いたい。
- 情報発信について……文化施設等が行う障がい者アートに関する公募展や、イベントなどの広報に協力してほしい。
- その他……支援センターの活動内容や、障害者芸術文化活動普及支援事業に関する問い合わせ。

相談内容から見えてきたこと

- 創造・発表・交流に関する情報を求める、当事者やそのご家族からの相談が多くありました。一方で、さまざまな芸術団体や文化施設で行う障がいのある人に向けたイベント周知に関する相談もありました。情報をつなぐために「神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターだより」として、集まった情報を必要な方にお届けしました。
- お受けした相談に対しては、文化施設などできるだけ身近な地域資源の情報をお伝えしてます。地域の文化施設が相談窓口となり、親身にやりとりしてくださることもあります。支援センターだけで解決するのではなく、さまざまな機関との連携の必要性を感じています。

情報収集・発信

パンフレットを作成し、相談窓口など事業の周知を行いました。ウェブサイトでは、センター主催事業などの広報をしました。また、「神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターだより」として、県内外の障がい者の芸術文化活動に関する情報発信を行いました。こちらのお知らせは、メーリングリストでもお届けしました。

■ メディア掲載・シンポジウム等への登壇

メディア掲載	●かながわ県のたより　令和4年12月号No.813「ともいきバトン」 ●ぱれっと・はだの　広報誌第18号　2023年1月
シンポジウム等への登壇	●「つながる！ひろがる！パラアート・ミーティング」（主催：公益財団法人 川崎市文化財団／2023年3月9日） ●「南東北・北関東ブロック広域センター　第3回研修」 （主催：特定非営利活動法人エイブル・アート・ジャパン／2022年11月28日）

■ 座談会「文化施設のみなさんと考える障がいのあれこれ」

▶テーマ：障がいの有無に関わらず、文化芸術に取り組める環境づくり　▶ゲスト：久保田陽子さん、和田久美子さん（公益財団法人 川崎市文化財団）

◎ 日時：2023年2月28日（火）10時～11時30分　◎ 参加者：12名
◎ 会場：ミューザ川崎シンフォニーホール 市民交流室（川崎市幸区大宮町1310 4F）

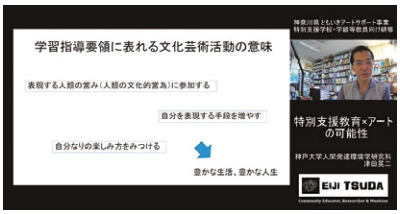
地域の文化拠点となる劇場やホール、美術館などの文化施設。障がいのある人を含むさまざまな人が訪れる場所として、どんなことがあったらよいのか、文化施設の職員のみなさんといっしょに考える座談会を行ないました。今回は川崎市文化財団が取り組む「パラアート事業」や、財団が運営するミューザ川崎シンフォニーホールなどの文化施設での鑑賞支援についてお話をうかがいました。県内各地の文化施設のみなさんと、ふだんの悩みごとや工夫など情報交換をしながら、考えを深める機会となりました。

特別支援学校の先生に向けた取組み

特別支援学校・学級の先生を対象とした研修を行いました。障がいのある子どもたちの学びにおける芸術文化の意義や、地域のさまざまな施設・団体等と連携することで広がる可能性を考えるオンライン講座と、ふだんから交流を持っている特別支援学校と普通学校の特別支援級の教員を対象とした美術ワークショップ行いました。身近な素材を触ったり、空間全体を彩ることで五感を刺激する方法を体験し、ふだんの授業に取り入れられるヒントとなったのではないかと思います。　※こちらの事業は神奈川県共生推進本部室による「ともいきアートサポート事業」の一環として行いました。

1. オンライン講座

◎ テーマ：特別支援教育×アートの可能性
◎ 講師：津田英二
（神戸大学附属特別支援学校 校長／神戸大学大学院人間発達環境学研究科 教授）
◎ 開催形態：オンデマンド配信
◎ 公開期間：2022年10月24日（月）～11月30日（水）



2. 実技研修

◎ テーマ：重度重複障害のある子どもたちとの、ものを介した関わり方、楽しみ方を体験する
◎ アーティスト：ドゥイ（造形ユニット）
◎ 開催形態：対面で実施
◎ 対象：神奈川県立平塚養護学校の教員、平塚市立金目小学校の特別支援級の教員

	実施日	参加者	場所
①	7月29日（金）	13名	ひらしん平塚文化芸術ホール 大会議室（平塚市見附町16-1）
②	8月24日（水）	19名	神奈川県立平塚養護学校（平塚市寺田縄590）

協力委員会

神奈川県内の多分野における関係者のネットワークづくりや、支援センターの運営方針について検討する場として、県内外で活動する障がいがある人の芸術文化活動に造詣の深い専門家による協力委員会を設置し、年２回の会議を開催しました。今回は、今年度行った「神奈川県内福祉施設への芸術文化活動に関するアンケート調査」の結果（詳細はP.9～14）の共有と、その活用方法についてご意見をいただきました。

構成員	専門委員	相田泰宏（独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所　情報・支援部　主任研究員） 梨本加菜（鎌倉女子大学　児童学部　教授） 又村あおい（一般社団法人 全国手をつなぐ育成会連合会　事務局長兼常務理事） 和田剛（障害者スポーツ文化センター　横浜ラポール　文化事業課長）
	行政関係者	神奈川県障害福祉課、神奈川県共生推進本部室、神奈川県文化課、神奈川県特別支援教育課、神奈川県生涯学習課

第１回　日時：2022年12月26日（月）13時～15時
開催形態：オンライン会議システムZoomを使用

協力委員の紹介／「神奈川県内福祉施設への芸術文化活動に関するアンケート調査」の結果について

初回ということで、協力委員のみなさんの活動についてご紹介いただきました。また、「神奈川県内福祉施設への芸術文化活動に関するアンケート調査」の結果を報告し、所感をうかがいました。「人材に関して課題があることが分かった」「障害者文化芸術活動推進法の認知度が低いので、周知が必要なのでは」など、それぞれの知見からご意見をいただきました。

第２回　日時：2023年2月22日（水）10時～12時
開催形態：オンライン会議システムZoomを使用

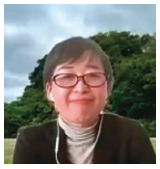
調査結果成果物の活用方法について／次年度の事業方針について

アンケート調査の結果から見えたアート活動に取り組む福祉施設を、障害保健福祉圏域ごとにまとめ、マップを作成しました。どのような活用が期待されるか、ご意見をいただきました。「県内のさまざまな取組みが顕在化されるとよい」「今後障がい福祉分野に関わる学生にも情報が届くとよいのでは」といったお話がありました。あわせて、次年度の支援センターの方針についても議論が行われました。

相田泰宏（あいだ・やすひろ）

横浜市内の特別支援学校教員を経て、令和４年度より現職。障がい児のキャリア教育や就労支援、進路指導における連携のあり方などを研究している。地域に関わらず水準の高い特別支援教育を受けられる環境を整えるために、情報収集・発信をしている。

梨本加菜（なしもと・かな）



学校教員と学芸員の養成に携わる。青少年の芸術文化活動を豊かにするための国内外の博物館等の公共施設や地方行政、民間組織、専門職のあり方に関する調査研究を続けている。専門は教育学（教育行政、社会教育、博物館教育）。

又村あおい（またむら・あおい）

令和元年度まで平塚市役所にて福祉総務課に在籍。過去、障害福祉課在籍時は、障がい者福祉計画、障がい児支援全般などを担当。平成26年度に内閣府へ出向、障害者差別解消法の策定に関わり障害者差別解消法関係の国検討会委員も務める。令和２年度より現職。

和田剛（わだ・たけし）

2001年より社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団に入職。障害者スポーツ文化センター横浜ラポール文化事業担当を経て現職。障がいのある方の芸術発表の場でもある「横浜ラポール芸術市場」をはじめとした障がい者の余暇支援事業を展開。

『神奈川県内福祉施設への芸術文化活動に関するアンケート調査』集計結果

今後の障がいのある人の芸術活動の取組みの参考とするため、神奈川県内の福祉施設を対象に芸術活動の実態並びに意識の調査を行いました。調査期間は、令和４年５月23日～６月24日までとし、福祉施設3,681か所に調査票を配布、417か所から回答がありました。（有効回答率：11.3%）

調査概要

名称：神奈川県内福祉施設への芸術文化活動に関する調査

目的：福祉施設における芸術文化活動の実態並びに意識を調査し、現状を把握する

対象：神奈川県内の福祉施設、作業所／回収方法：FAX送付またはウェブからの入力

回答状況（回答数：417）

【障害種別（重複あり）】

※その他…発達障がい、難病

種別	身体		知的		精神		その他	
回答数	164	39%	335	80%	202	48%	38	9%

【サービス種別（重複あり）】

種別	居宅介護	重度訪問介護	行動援護	同行援護	重度障害者等包括支援	療養介護	生活介護
回答数	4	3	1	1	0	1	170

種別	自立訓練（機能訓練）	自立訓練（生活訓練）※宿泊型含む	就労移行支援	就労継続支援A型	就労継続支援B型	障害者地域作業所	地域活動支援センター
回答数	1	15	46	24	127	4	60

種別	共同生活援助	施設入所支援	短期入所	一般相談支援（地域移行支援）	一般相談支援（地域定着支援）	計画相談支援（特定相談支援）	障害児相談支援
回答数	16	16	29	5	4	23	9

種別	児童発達支援	放課後等デイサービス	保育所等訪問支援	医療型児童発達支援	福祉型障害児入所施設	医療型障害児入所施設	居宅訪問型児童発達支援
回答数	11	20	4	1	2	1	0

【市町村別】

市町村	横浜市	川崎市	相模原市	横須賀市	鎌倉市	逗子市	三浦市	葉山町	藤沢市	茅ヶ崎市	寒川町
回答数	136	69	43	16	13	6	2	0	33	7	4

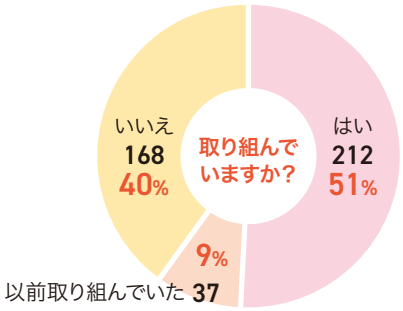
市町村	平塚市	秦野市	伊勢原市	大磯町	二宮町	厚木市	大和市	海老名市	座間市	綾瀬市	愛川町
回答数	11	14	6	1	2	16	7	7	4	1	4

市町村	清川村	小田原市	南足柄市	中井町	大井町	松田町	山北町	開成町	箱根町	真鶴町	湯河原町
回答数	0	10	1	0	0	0	0	2	0	0	2

集計結果（選択回答式）

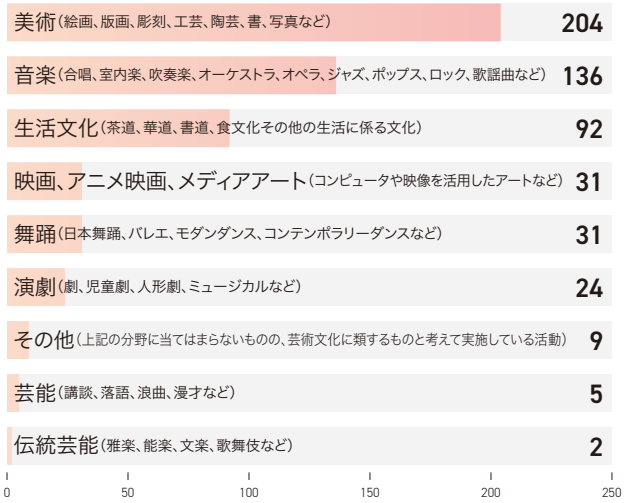
施設における芸術文化活動に関する実施状況について

1. 施設として、余暇活動や作業等で現在、芸術文化活動に取り組んでいること、もしくは取り組んだことはありますか。



「はい」「以前取り組んでいた」を合わせると、6割の割の事業は芸術文化活動に取り組んだ経験がある。

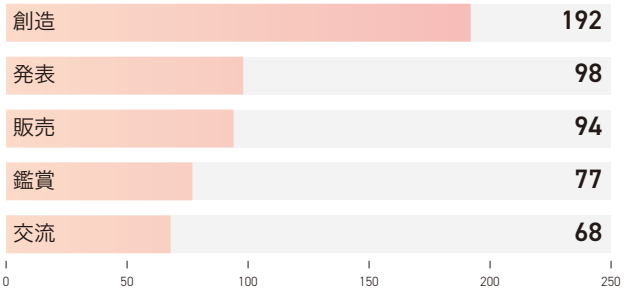
1-1. それはどのような内容ですか。または内容でしたか。（複数回答可）



【その他の内容】気功、ヨガ、お祭り、園芸

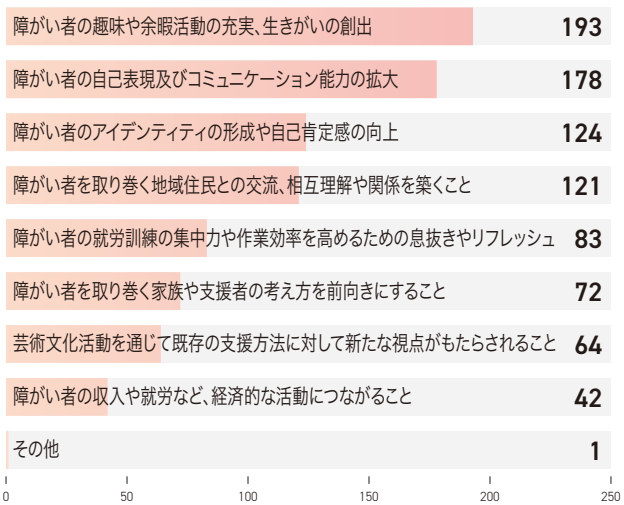
美術、音楽に続いて、生活文化が多い。

1-2. 取り組んでいる芸術文化活動を鑑賞、創造、発表、販売、交流の5つに分けるとすると、そのうちどれを実施していますか。または実施していましたか。（複数回答可）



創造する機会が多い。

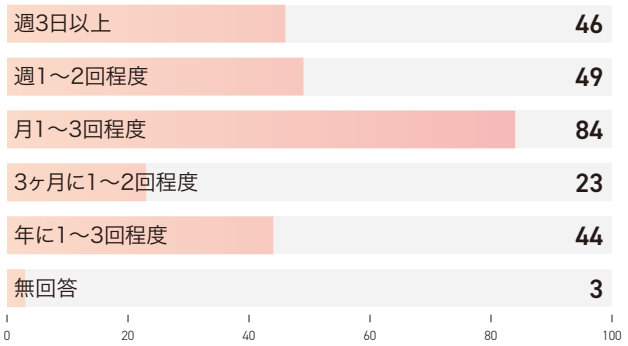
1-3. 芸術文化活動を通じて実感している、または実感していた成果があれば、あてはまる項目をお選びください。（複数回答可）



経済的な活動よりは、生きがいや自己表現、交流について実感がある。

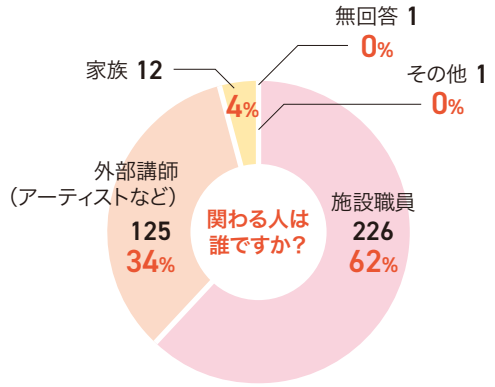
1-4. 芸術文化活動全体では、どのくらいの頻度で取り組んでいますか。または取り組んでいましたか。

（複数の芸術文化活動を行っている場合は、全体についてお答えください）



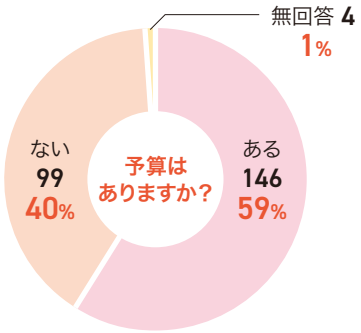
月1～2回という回答がいちばん多かった。

1-5. 取り組む際に関わる人、または関わっていた人は誰ですか。（複数回答可）



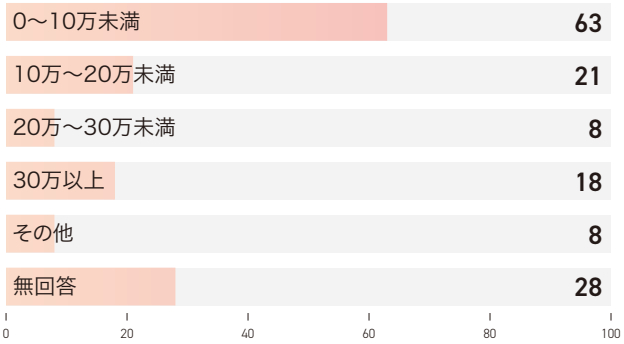
半数以上が施設職員による取組み。

1-6. 活動に関する予算はありますか。またはありましたか。ある場合は全体でどのくらいですか。



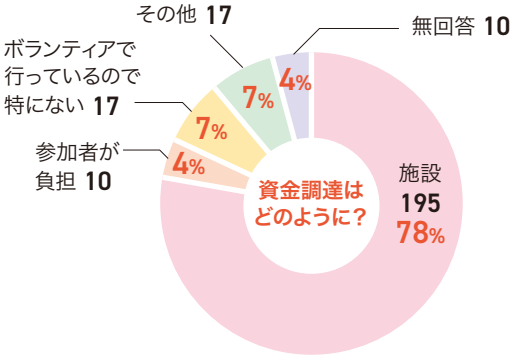
半数以上が「ある」と答えている。

●予算がある場合の金額



【その他の内容】特に決めていない、販売の売上金額による

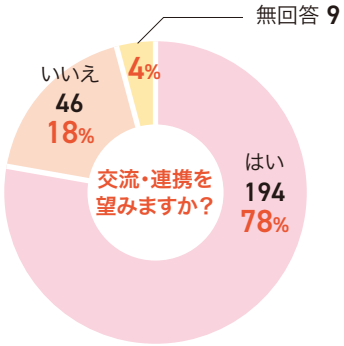
1-7. 活動資金はどのように調達していますか。またはしていましたか。



【その他の内容】補助金・助成金、販売の利益

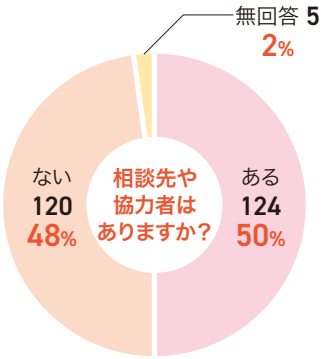
ほぼ施設が資金を負担している。

1-8. 芸術文化活動に取り組むうえで、地域や他団体との交流・連携を望みますか。



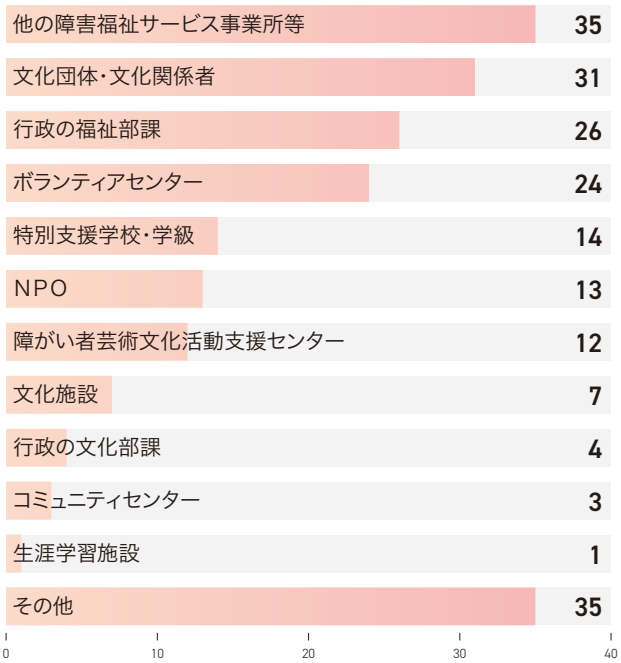
約8割が交流・連携を望んでいる。

1-9. 芸術文化活動に取り組むうえで、相談先や協力者（他の団体や企業、NPO、アーティスト、コーディネーターなど）とのつながりがありますか。またはありましたか。



半数が相談先や協力者のつながりがある。

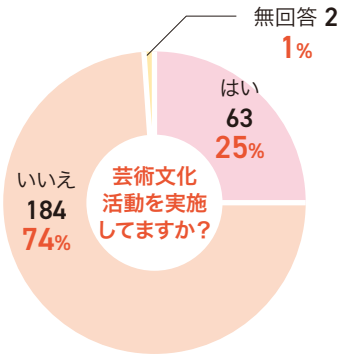
●ある場合はどのようなつながりですか。（複数回答可）



福祉関係のつながりが最も多いが、
文化団体・文化関係者とのつながりも同等程度ある。

【その他の内容】
個人的なつながり、音楽療法学会、自治体の生涯学習課

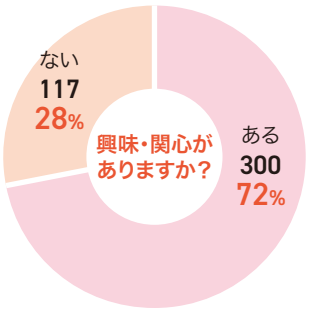
1-10. 地域住民や、自施設の利用者以外の障がい者が参加できる芸術文化活動を実施していますか。またはしていましたか。



※地域に開いた芸術文化活動を
実施している施設が4分の1程度ある。

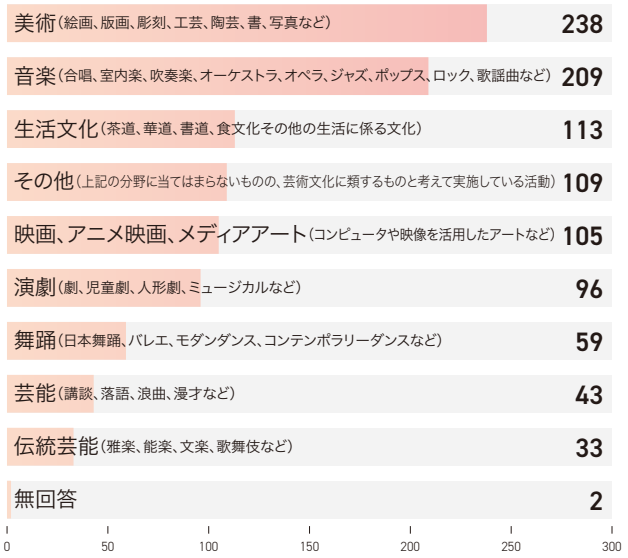
施設における芸術文化活動に関する興味関心や課題について

2. 芸術文化活動に対して、施設として興味・関心がありますか。



半数以上の施設が、
興味・関心があるという回答だった。

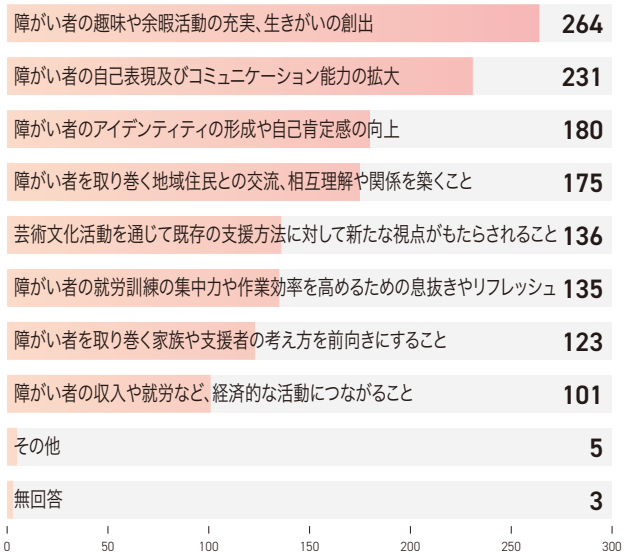
2-1. どのような芸術文化活動に興味・関心がありますか。（複数回答可）



【その他の内容】
武術、コスプレ、ラップ、DJ

「1-1.」の回答内容である、実際に取り組んでいる活動と同じジャンルが上位に並んだ。

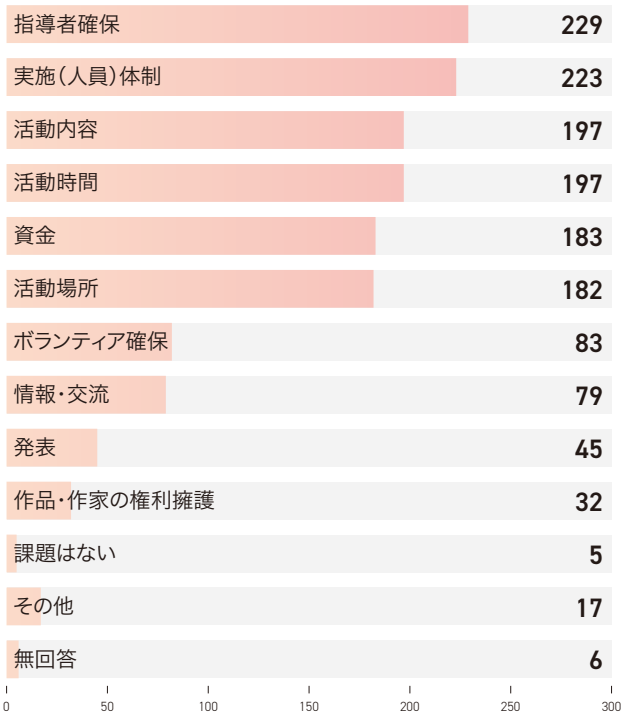
2-2. 芸術文化活動について、どのような成果を期待しますか。（複数回答可）



【その他の内容】
非日常的な活動をすることでの刺激、平和、人間観や障害観などの価値観の転換、気持ちの開放、本人の生きやすさにつながること

「1-3.」の回答内容である実感している効果に比べると、「芸術文化活動を通じて既存の支援方法に対して新たな視点がもたらされること」への期待の順位が高い。

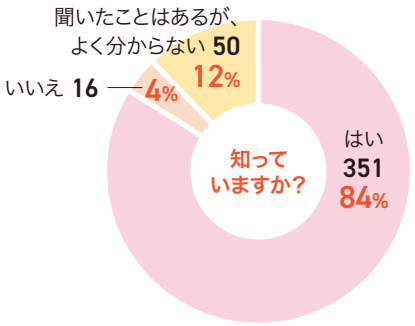
3. 芸術文化活動に取り組むうえでの課題はなんですか。（複数回答可）



【その他の内容】
感染症対策、利用者のニーズ、収入につながる仕事になること、年齢的な制約、やったことがないので見当がつかない

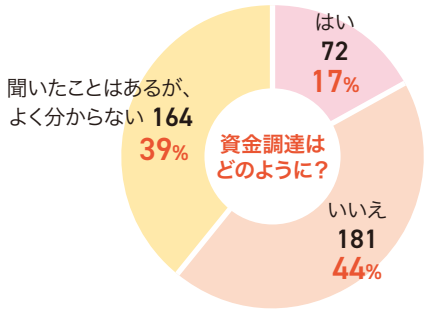
指導者確保、実施体制と人員に関する課題が上位となっている。

4. 障害者差別解消法について知っていますか。



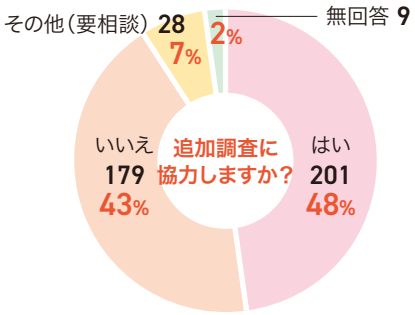
約8割が知っている。

5. 障害者文化芸術活動推進法について知っていますか。



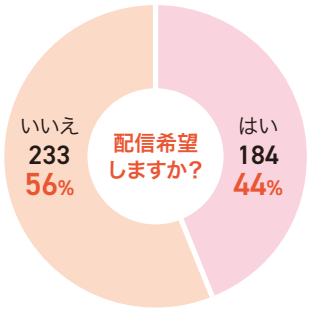
半数近くが「いいえ」という回答だった。

6. 今回の調査内容について、ヒアリングや施設訪問などの追加調査にご協力いただけますか。



感染症対策などが理由となり、
「いいえ」「要相談」という回答が多かった。

7. 今後、神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターによる県内の障がい者の芸術文化活動に関する情報を伝えるメールニュースの配信を希望しますか。



半数近くが情報の配信を希望している。

結果を受けて

芸術文化活動に対して実感／期待する成果について

経済的な活動よりも、生きがいの創出や自己表現や自己肯定感の向上、地域との交流といった障がいのある人の自己実現やコミュニケーションに対する成果を実感／期待していることが見えました。

外部との連携について

現在芸術文化活動に取り組んでいる、または以前取り組んでいたと回答した施設の多くが、地域や他団体との連携を望み、実際に外部とのつながりを持って活動を行っていることが分かりました。

課題について

芸術文化活動に取り組むうえでの課題の上位には、指導者確保、実施体制と人員に関する課題が並びました。いま取り組みに関わる人、または以前取り組んでいた際に関わっていた人の半数以上が施設職員という回答からも、関わる人の広がりが求められていることが見えました。

地域資源（文化施設・団体、生涯学習施設など）との
つながりづくりが必要とされていることを感じました。私たちとしても、芸術文化活動が多様な表現を
認めることや社会参加のきっかけとなるように、サポートしていきたいと思います。

今回の調査結果から見えた、地域に開いた芸術文化活動をしている福祉施設の一部を紹介する「いっしょにたのしむおさんぽマップ」を作成しました。ウェブサイトよりぜひご覧ください。 ▸▸▸ https://k-welfare.org/publications/

つくる

ここでは、障がいのある人が芸術文化活動に触れる機会をつくる活動についてご紹介します。

今年度は県内7か所の障害福祉サービス事業所にて芸術家によるワークショップを実施しました。今回は実施施設を公募で募り、28件あった応募のうち3か所の施設にお伺いすることになりました。まだまだコロナ禍の影響が残り、イベントや施設外の人と交流する機会が少なくなっているなか、いっしょに身体を動かしたり、音に触れたり、ものを作ったりすることでお互いを知り合う、豊かな時間が生まれました。

ワークショップ実施

飛行船 × 上村なおか

ダンス
DANCE

「そのままの身体に出会う」

- 期間：(1)2022年11月4日(金)、(2)11月21日(月)、(3)12月20日(火)　● 時間：10:45〜11:45／14:00〜15:00
- 場所：特定非営利活動法人でっかいそら　法人本部　レクリエーションルーム（横浜市瀬谷区瀬谷5-3-24）
- 参加者：(1)21名、(2)17名、(3)18名　● 対象：主に知的障がいのある成人
- アーティスト：上村なおか(ダンサー・振付家)　● アシスタント：酒井直之、宮崎あかね、吉田拓
- 対象施設名：生活介護事業所 飛行船　● 運営法人名：特定非営利活動法人でっかいそら　● 施設種別：障害福祉サービス事業所(生活介護)
- 住所：横浜市瀬谷区瀬谷5-15-5 グランドュール1階　● URL：http://www.dekkaisora.jp/shuroshien/hikousen.html

飛行船は、横浜市瀬谷区にある生活介護事業所です。主に知的障がいのある幅広い年代の方が、豊かに日々を過ごすこと大切に通われています。それぞれの表現を引き出し、みんなで共有する機会にしたい、また職員さんのふだんの関わりに活かしたいということで公募に応募してくださいました。今回はダンサーの上村なおかさんにご一緒していただき、一人ひとりの身体から立ち上がる、ささやかな表現を見つけていくような時間を過ごしました。全体を3つのグループに分け、午前と午後の枠に1〜3回ずつ参加しました。飛行船のすぐ近くにある法人本部内のレクリエーションルームを会場に、のびのびと身体を動かしました。

各日の様子

1日目 11/4金 10:45〜11:45／14:00〜15:00 参加者 21名

午前のグループは、跳んだり声を出したり、
最初からパワー全開。
午後は、椅子に座ってゆったり動きます。

2日目 11/21月 10:45〜11:45／14:00〜15:00 参加者 17名

床に寝転がったり、足の指を動かしたり。その人の身体を上村さんたちが写し取り、他の人にも伝わっていきます。

3日目 12/20火 10:45〜11:45／14:00〜15:00 参加者 18名

利用者さんが鳴らす太鼓で踊ったり、
職員さんの関わりがふくらんでいったり、
さまざまダンスが生まれました。

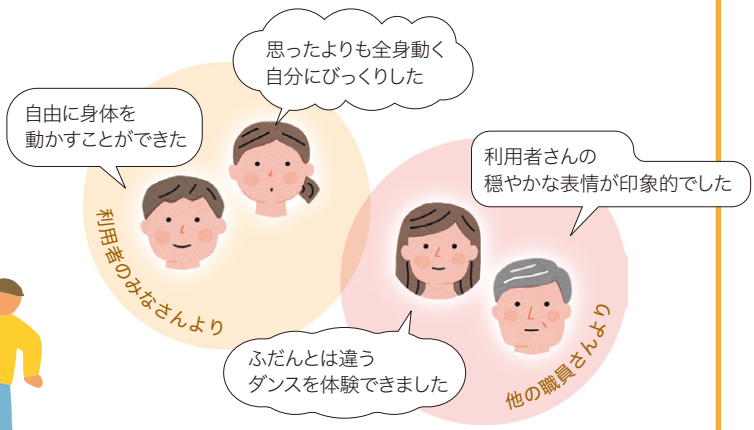
実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

ふだんの活動の中で、自ら活動に参加する事が少ない方もいます。そのため、さまざまな方法で声をかけたりタイミングをずらしたり、工夫して参加意欲を高める事が自分たち職員の大きな役割であると思っていました。しかし、上村さんたちと話をする中で、職員たちもいっしょに踊って、利用者のみなさんも踊っていいのだと感じていただこう、自分から動き出すまで待ってみましょう、という提案がありました。ダンスを通じて自分たちの支援方法について考える良い機会となり、時には待つことも必要であると気づきました。

渡邉皇太（わたなべ・こうた）

介護福祉士。特定非営利活動法人でっかいそら飛行船の職員として10年間勤務。サービス管理責任者として利用者の支援計画作成を担当している。また、「笑顔で通所、笑顔で帰宅」をテーマに日々プログラム検討している。



アーティストからのコメント

飛行船は、見学に行った時から「本当にさまざまな人がいる！」という印象でした。障がいというよりも、それぞれの『からだ』があるということにあらためて気づかされ、惹かれました。その人の『からだ』に現れていることが全てダンスなのではないか、と思って眺めたり一緒にいたり動いたりして、自分にとっても新たなダンスの発見がありました。『からだ』でつきあうということがもたらすことの豊かさと可能性を実感した現場でした。

上村なおか（うえむら・なおか） https://twitter.com/naokatombo

お茶の水女子大学舞踊教育学科卒業。国内外で公演を行うほか、他のジャンルのアーティストとの共演や振付家としても活動の幅を広げる。また、身体表現教室や様々な世代へのワークショップを通して、身体の発見と冒険を実践中。

まとめ

毎回はじめは、歩き回ったり跳びはねたりする人もいれば、床に寝転んでのんびりしている人がいたりと、さまざまな過ごし方をしている飛行船のみなさん。上村さんたちが一人ひとりとあいさつしていくうちに、いつの間にか一体感が生まれていく、不思議な時間でした。それぞれが隣にいる誰かの身体に気づき、ささやかなやりとりを重ねることで、そのままの身体でいてもいいのだという空気が満ちていきました。この空気でどのように日々を紡ぐことができるのか。飛行船のみなさんとの探究は続きます。

くれよん × 北川結

ダンス
DANCE

「からだを使って遊ぶ」

- 期間：(1)2022年11月5日(土)、(2)11月10日(木)、(3)11月12日(土)　● 時間：(1)(3)13:00〜14:00、(2)11:00〜12:00
- 会場：(3日目のみ)厚木市南毛利学習支援センター　音楽室(厚木市長谷1094-1)　● 参加者：(1)7名、(2)6名、(3)13名
- 対象：主に発達障がいのある幼児、児童　● アーティスト：北川結(ダンサー・振付家・イラストレーター)　● アシスタント：内海正考、中村理、水越朋
- 対象施設名：児童デイサービスくれよん　● 運営法人名：NPO法人ワーカーズ・コレクティブくれよん
- 施設種別：障害児通所支援事業所(児童発達支援、放課後等デイサービス)
- 住所：神奈川県厚木市飯山南5-28-8　● URL：http://www.wco-kureyon.org

厚木市にある児童デイサービスくれよんは、発達障がいや知的障がいのある未就学から学齢期の子どもたちが通う施設です。同じ敷地内には保育室や学童もあり、障がいの有無に関わらず、子どもたちがともに育ちあう場となることを大切にしています。コロナ禍の影響を受けて子どもたちはもちろん、保護者のみなさん同士が交流を持つ機会も持ちづらくなっていることから、親子で表現を楽しむきっかけづくりとして公募に応募がありました。今回はダンサーの北川結さんといっしょに身体を使った遊びを楽しみました。学齢児、未就学児、混合と年齢別にグループ分けし、ふだん過ごしているくれよんの部屋や、地域の生涯学習施設を会場にしました。保護者のみなさんだけではなく、きょうだいも参加する回もあり、さまざまな関わり合いが生まれました。

各日の様子

1日目 11/5(土) 13:00〜14:00　参加者 7名

今回は学齢児の親子が対象です。
音楽が止まったら踊るのをやめ、動いていないか「ストップ警察」がチェックするゲームに盛り上がりました。

2日目 11/10(木) 11:00〜12:00　参加者 6名

未就学児の親子が参加。
大人たちが身体でトンネルをつくると、
子どもたちは夢中になってくぐっていました。

3日目 11/12(土) 13:00〜14:00　参加者 13名

人数が多くなった今回は、別の場所を借りて実施。
北川さんたちの動きを真似しながら、
大人も子どもも汗だくになって身体を動かしました。

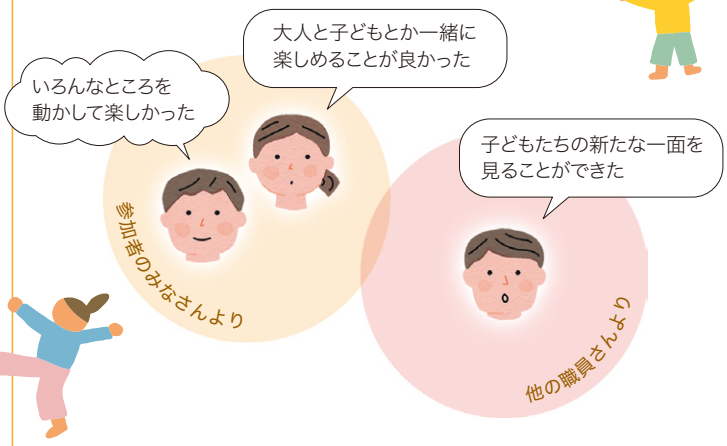
実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

ダンスってどんなことするの？とはじめは緊張していましたが、身体を使ってあそぶ、好きに動いていいんだ、と感じ、とても楽しかったです。一般の親子企画には参加しづらいけれど、慣れた職員もいることで親子が安心して参加し、ダンスを楽しめる良い機会が提供できたのではないかと思います。特に大人のトンネルを子どもたちがくぐったり、動きを止める「ストップ警察」はワークショップ後もふだんの活動に取り入れて楽しんでいます！

井上久美子（いのうえ・くみこ）

幼稚園教諭として勤務。その後、NPO法人ワーカーズ・コレクティブくれよんの保育室に。保育主任を経て、同法人の児童デイサービスくれよんに異動。2019年秋より施設長を務めながら、日々子どもたちの支援に携わっている。



アーティストからのコメント

どの回も、子どもたちそれぞれが新しい遊びや踊り、場や人への関わり方を見つけているように感じました。私たちも子どもたちの反応を受けることで全体の進行を組立てることができました。また、保護者やくれよんの職員のみなさんがとても熱心に関わってくださったことが、ワークショップ全体の盛り上がりにつながったと思います。子どもと保護者、職員さんやダンサーなど、さまざまな立場の方々といっしょに場をつくる時間となり、発見が多かったです。

北川結（きたがわ・ゆう）　https://ukitagawau.wixsite.com/yukitagawa

桜美林大学にてコンテンポラリーダンスを木佐貫邦子に師事。2008年より白神ももこ主宰のモモンガ・コンプレックスにメンバーとして参加。
さまざまな演出家、振付家の作品に出演するほか、振付提供や、ダンスWSなども行う。イラストレーターとしても活動中。

まとめ

親子で手と手など身体を触れ合わせることから始まり、北川さんたちや他の参加者の動きを真似したり、身体のトンネルをくぐったり、ゲーム的な要素も取り入れながら身体を使って遊び尽くしました。ふだんは初めての人や場所などが苦手な子どももいて、既存の親子イベントには参加しづらいという声があったことが印象的でした。地域の文化施設などとも連携しながら、安心して思いっきり表現を楽しめる場を整えるためにはどうしたらよいのか、考えていきたいと思います。

きたのば × 西井夕紀子

音楽
MUSIC

「きもちを音にのせて」

- 期間：（1）2022年10月5日(水)、（2）11月9日(水)、（3）12月21日(水)　● 時間：（1）（2）13:30〜14:30、（3）13:30〜15:00
- 参加者：（1）9名、（2）6名、（3）5名　● 対象：主に精神障がいのある成人
- アーティスト：西井夕紀子（作曲家）　● アシスタント：鈴木雄大、村野瑞希、YuimaEnya
- 対象施設名：地域活動支援センター きたのば　● 運営法人名：社会福祉法人SKYかわさき　● 施設種別：地域活動支援センター
- 住所：神奈川県川崎市多摩区登戸2341-1　● URL：https://www.sky1995.com/office/kitanova.html

川崎市にある地域活動支援センターきたのばは、精神障がいのある方の社会参加の場として、1987年に立ち上がった施設です。在籍する約25名はほとんどが女性で、幅広い年代の方がいます。刺繍やビーズアクセサリーなどの製品づくりに取組み、バザーなど地域のイベントで販売しています。コロナ禍であることも相まって作業中は会話がしづらく、利用者同士の関わりが少ないことから、楽しみながらお互いを知る機会をつくりたいということで、公募に応募がありました。今回は作曲家の西井夕紀子さんにご一緒していただき、音をとおしてそれぞれが感じたことや思っていることを共有する時間を過ごしました。楽器の音で相手に呼びかけたり、自分のことを口ずさみながら伝えたり、まるでおしゃべりをするようにやりとりが生まれていました。

各日の様子

1日目 10/5㈬ 13:30〜14:30　参加者 9名

さまざまな楽器を鳴らしてセッションをしたり、
西井さんの伴奏に合わせて自己紹介をしました。

2日目 11/9㈬ 13:30〜14:30　参加者 6名

楽器でのセッションのあと
「1日の中で好きな時間」を教えてもらいました。
メロディーにのせて歌にする人も。

3日目 12/21㈬ 13:30〜15:00　参加者 5名

前回の言葉をつないで、歌をつくります。
みなさんからのアイディアが盛り込まれ、
ひとつの歌が完成しました。

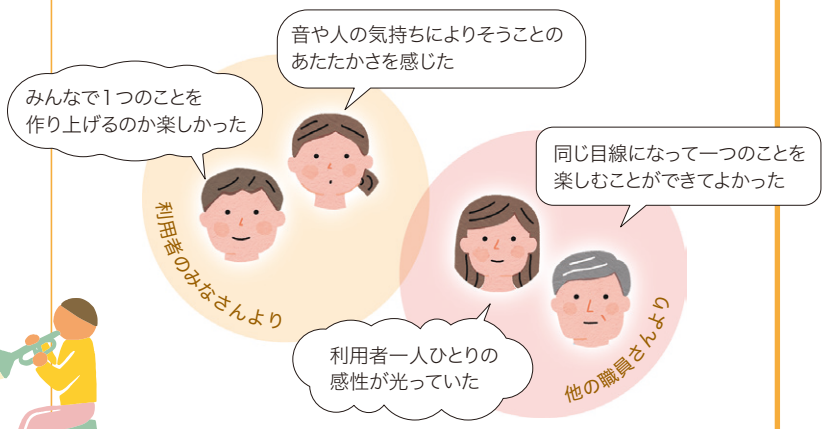
実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

きたのばのみなさんは自己表現や自己発信が控えめな方が多い印象を持っていましたが、歌いながら自己紹介をしたり、ふだんより多く言葉を語ったり、踊ったり、ユーモア満点の詩を作ったり…。笑顔も多く作業だけではみられない魅力を引き出していただきました。みなさんにとって、自己表現が楽しい！と感じられる機会になり、自信につながった方もいると思いました。職員が、一人ひとりの魅力をひきだせていなかっただけなのかもしれません。

鹿野絵莉子（しかの・えりこ）

精神保健福祉士。2012年、社会福祉法人SKYかわさき入職、21年より現職。メンバーの想いや語りから学び、一人ひとりが輝ける活動を共に考え、展開することに重きを置く。きたのばInstagramでは楽しい活動紹介をテーマにメンバーと共に歌い、踊っている。



アーティストからのコメント

一緒にお茶を飲むような感覚で、テーブルについたままできる静かなセッションを中心に進めていきました。ふだんビーズ製品などのクラフトを作っていらっしゃることもあり、楽器のつくりにも興味を持ってくださいました。音による会話を中心に進めた前半に続き、後半は自分の好きな時間について言葉にし、音楽にのせました。みなさんが心の中に持っていることを垣間見ることができ嬉しい時間でした。

西井夕紀子（にしい・ゆきこ）　https://www.yukikonishii.com/

舞台、映画への楽曲提供を行うかたわら、人が音楽を奏ではじめる瞬間・作りはじめる瞬間に魅力を感じ、学校、文化施設、福祉施設でセッションや曲作りを実施。東京芸術大学音楽学部音楽環境創造学科卒業、同大学院修了。

まとめ

施設内で音楽を流すことはあっても、歌ったり演奏したりすることはあまり身近ではなかったというきたのばのみなさん。そうとは思えないほど、自然に楽器やその音に親しみ、メロディーを口ずさんでいました。西井さんや他の参加者が発する音や言葉に呼応するように、その人の表現がふくらんでいくようでした。実施後は、自分の表現したいことを職員さんに伝えるようになった人もいたようで、日常的に施設の取組みとして芸術文化活動を続けていくにはどうすればよいか、いっしょに考えていきたいと思います。

スプラウト × 尾引浩志

音楽
MUSIC

「音に会いに出かける」

- 期間：（1）2022年9月22日(木)、（2）10月25日(火)　● 時間：（1）13:45〜14:35、（2）10:45〜11:45
- 会場：（2日目のみ）：ひらしん平塚文化芸術ホール（平塚市見附町16-1）
- 参加者：（1）10名、（2）9名　● 対象：主に身体障がいと知的障がいを併せ持った成人
- アーティスト：尾引浩志（音楽家）　● アシスタント：武徹太郎

- 対象施設名：スプラウト　● 運営法人名：NPO法人障害児・者家族サポート事業所 スプラウト　● 施設種別：障害福祉サービス事業所（生活介護）
- 住所：神奈川県平塚市北豊田510-3　● URL：http://sprout.or.jp/index.html

平塚市にあるスプラウトは、10代〜40代の方が利用する生活介護と、子ども達が過ごす放課後等デイサービスの事業を行う施設です。利用する人のほとんどが車椅子を使用しており、痰の吸引など医療的ケアが必要な人もいます。ふだんから地域のボランティアを招いた音楽鑑賞の機会など、利用者のみなさんの経験や人との関わりが広がるような活動をしています。昨年度もスプラウトで演奏していただいた、音楽家の尾引浩志さんの音楽を、今度はホールで聞いてみたい、という施設の声から、地域のホールで小さなコンサートを開きました。ホーメイ、イギルや尾引さんの自作楽器「オケショール」などの、さまざまな音の響きを身体全体で味わいました。

各日の様子

1日目

9/22(木) 13:45~14:35　参加者 10名

スプラウトにて尾引さんと久々の再会。
ホーメイを聞いていっしょに口を動かす人も。

2日目

10/25(火) 10:45~11:45　参加者 9名

ホールで聞く、武さんの自作楽器も加わったにぎやかな音たちに、
思わずみなさん踊りだします。

実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

ホールでの演奏では、最初は全員が静かに音を聞いていました。いつもにぎやかなスプラウトにとって、新鮮なことでした。しかし、どうにも我慢できなくなった一人が大きな声で笑い始め、尾引さんたちの近くに行き、いつものスプラウトの雰囲気になりました。それからは、おどる人、一緒に音を鳴らす人、笑う人。それぞれの楽しみ方で参加することができたと思います。1回の取り組みで「静かに聴いて楽しむ」と「一緒にわいわい楽しむ」の2つができた、1粒で2度おいしい時間となりました。

佐藤大輔（さとう・だいすけ）

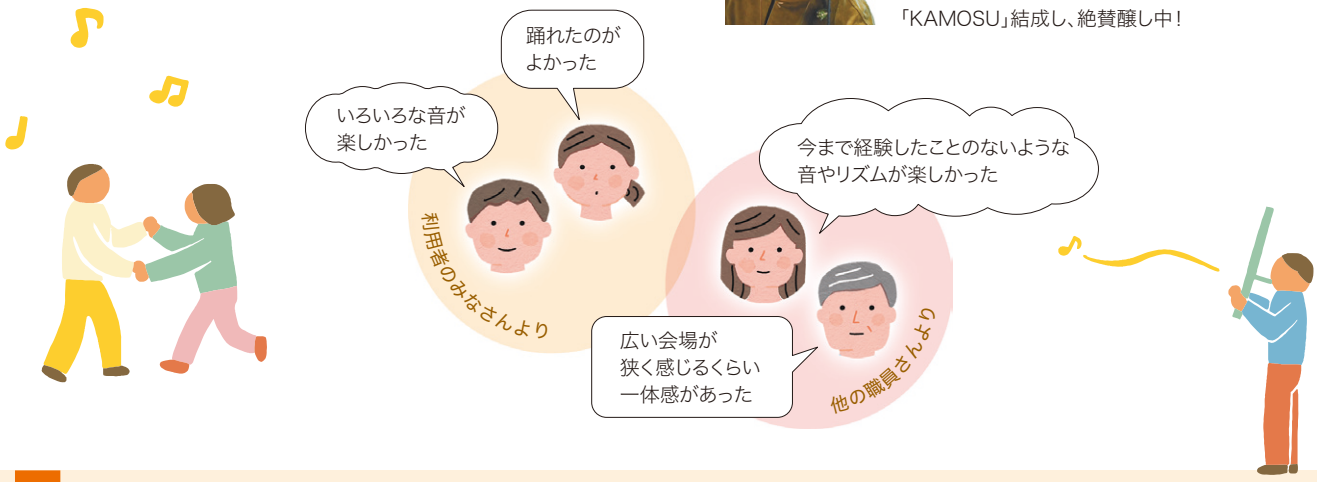
NPO法人スプラウト看護師兼管理者。大学病院でがん末期患者に積極的に関わる。退職後、和光大学に進学し後に大学院へ。同時に介護福祉士養成校の講師を始める。2017年より現職。

アーティストからのコメント

ホールでのワークショップでは、いっしょに音で遊んでみたいミュージシャンNo.1！の武徹太郎さんと即興でガッツリ遊んでみたい！そして自分達が楽しければ、参加者も楽しいはず！というコンセプトで臨みました。本番が始まり、前半はやや緊張気味な方もいたようですが、こちらの演奏が進むにつれて次第にほぐれていき、最後はダンスパーティー！みなさん楽しんでいるようすが伝わり、演奏も興がのって終わるのが名残惜しい！またみんなで音で遊びたいですね！

尾引浩志（おびき・ひろし）　https://www.kamosu.asia/（KAMOSU）

アジア中央部に伝わる倍音唱法「ホーメイ」、小さな倍音楽器「口琴」などを操る倍音音楽家。
倍音楽団「倍音S」の活動を経て、能楽家、ダンサーとの共演、舞台での演奏、ワークショップなど、ジャンルも国境も越えて活動中。2016年、音を「醸す」楽団「KAMOSU」結成し、絶賛醸し中！



まとめ

これまでコロナ禍の影響を受けて実現が難しかった「ホールで芸術鑑賞をしてみたい」という職員さんの思いを受けて、地域のホールにいっしょに出かけてみました。スプラウトでは音に包まれるような感覚を味わい、ホールでは尾引さんたちといっしょに音と戯れる。さまざまな音との出会いがあったのではないかと思います。他の事業所のみなさんにもお声がけして、音楽コンサートなどを開催するという次の展開も考えているというスプラウトのみなさん。地域の文化施設が身近な存在になったのなら嬉しいです。

ぱれっと・はだの × 原田暁

「自然にふれるものづくり」

- 期間：（1）2022年11月11日(金)、（2）12月14日(水)、（3）2023年1月13日(金)
- 時間：13:30〜15:00
- 会場：秦野市表丹沢野外活動センター（秦野市菩提2046-5）
- 参加者：（1）10名、（2）6名、（3）8名
- 対象：主に精神障がいのある成人
- アーティスト：原田暁（美術家）
- アシスタント：石黒和夫、座間君仁
- 対象施設名：秦野市地域生活支援センターぱれっと・はだの
- 運営法人名：一般社団法人　秦野市障害者地域生活支援推進機構
- 施設種別：地域活動支援センター
- 住所：神奈川県秦野市本町2-7-25
- URL：http://hcp-support-hadano.or.jp/newpage3.html

秦野市地域生活支援センターぱれっと・はだのは、相談支援や就労支援などの機能を備えた障害者地域生活支援拠点として、2017年に設置されました。地域活動支援事業では、フリースペースの開室や音楽や創作プログラムの開催などを通して、主に精神障がいのある方の居場所を提供しています。今回は地域資源の活用をテーマに、表丹沢野外活動センターを会場として、秦野のスギやヒノキを使った創作を行いました。ご一緒していただいたのは、森を創作の場として自然の中にある素材を使った作品づくりを続ける、美術家の原田暁さん。大きな二人びきのこぎりやドリルなど、ふだん目にしない道具に挑戦しながら、木の手触りや形、香りを感じる時間となりました。ぱれっと・はだの以外の福祉施設からも参加者が集まり、個性豊かな作品が完成しました。

各日の様子

1日目 11/11金 13:30～15:00　参加者 10名

２人１組で大きな丸太を切るところから始まります。
穴に小枝を差し、オブジェが完成しました。

2日目 12/14水 13:30～15:00　参加者 6名

今回は車輪をつけて車に。ドリルでの穴開けや、小刀で木を削ることにも挑戦しました。

3日目 1/13金 13:30～15:00　参加者 8名

小枝の差し方を少し変えて、
動物が完成。枝の特徴を見つけて、
顔やしっぽにしていました。

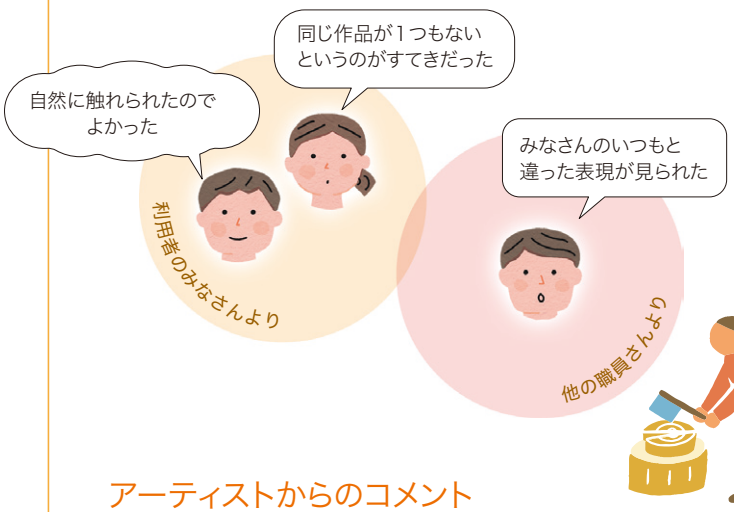
実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

秦野の土地の自然を十分に活かした活動ができないかと当初より考えていたので、今回のワークショップが実現してよかったです。また、地域の施設のみなさんも多く参加し、同じ地域で過ごす障がいのある人同士の交流がはかれたのではないかと思います。職員としても、秦野の地域性の良いところを生かした取組みを体験できたことは、今後自分たちで企画運営していくことを考えたときに貴重な経験となりました。

川嶋恵子（かわしま・けいこ）

社会福祉士、精神保健福祉士、相談支援専門員。「秦野市地域生活支援センター ぱれっと・はだの」の職員として、2020年から地域活動支援事業（フリースペース運営、プログラム企画立案、ピアサポーター養成・ピア活動支援）を担当する。



アーティストからのコメント

二人びきのこぎりで木を切る工程を、みなさん楽しんでいたことが印象的でした。作業自体もシンプルなので、分かりやすくてよかったのかなと思います。また、毎回少しずつ変化があることで、続けて参加した人も工夫ができたのではないかと思います。のこぎりなどの道具は、けがをするリスクはありますが、３人がそれぞれサポートしながら道具を使ってもらいました。安全に、楽しんでもらえてよかったです。

原田暁（はらだ・あかつき）　https://morilab.amebaownd.com/（GROUP創造と森の声）

横浜市緑区・旭区の「豊かな自然」で、アート・音楽を通じ人々が交流するとともに楽しみながら里山の自然保全活動をする団体「GROUP創造と森の声」に参加。幅広い世代を対象としたワークショップや、森の中で自然物を生かした作品をつくり展示などを行っている。

まとめ

障がいのある人の地域生活を支える拠点としての役割も担う、ぱれっと・はだの。地域資源を活用し、他の施設利用者にも参加の窓口を広げたことで、施設のなかだけに留まらない取組みとなりました。力を合わせてのこぎりをひいたり、切りたての木の手触りやにおいを感じたり、周囲の人や自然との関わりを楽しむことができたのではないかと思います。秦野には名水が湧く水源や町中の彫刻など、まだまだ魅力的な地域資源があります。今後も、障がいのある人の暮らしに芸術文化が関わることで広がる可能性を、地域の中で見つけていけることに期待しています。

©井上亮

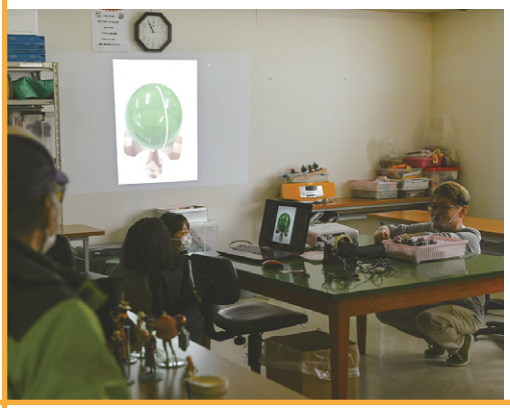
第３けやき × 金子愛帆

美術
ART

「それぞれの世界を写す」

- 期間：（1）2022年11月1日(火)、（2）11月15日(火)、（3）11月29日(火)
- 時間：（1）（2）10:30〜12:00、（3）10:30〜12:00／13:00〜14:00
- 参加者：（1）11名、（2）7名、（3）10名
- 対象：主に精神障がいのある成人
- アーティスト：金子愛帆（フォトグラファー・ダンサー）
- アシスタント：井上亮
- 対象施設名：地域活動支援センター 第3けやき
- 運営法人名：特定非営利活動法人けやきの会
- 施設種別：地域活動支援センター
- 住所：神奈川県相模原市中央区由野台2-27-10
- URL：http://keyaki.blog.jp/

相模原市にある第３けやきは、主に精神障がいのある方が日々を過ごす地域活動支援センターです。登録者は25名、1日10人程度が利用しています。特に地域交流活動に力を入れ、ゴミ拾いや落書き消し、地域行事への参加などさまざまな活動に取り組んでいます。今回は、地域で開催される写真展をきっかけに写真に興味を持つ利用者さんがいるということで、フォトグラファーの金子愛帆さんと写真の楽しみ方を探求しました。自分の好きなものや、施設内で見つけた気になるものを、アングルや背景を変えて撮影し、印象の違いを確かめました。撮った写真はプロジェクターで投影して見ながら、金子さんたちやみんなからコメントをもらいます。最後はお気に入りの一枚を印刷し、施設の一角でちょっとした写真展ができました。



©井上亮

各日の様子

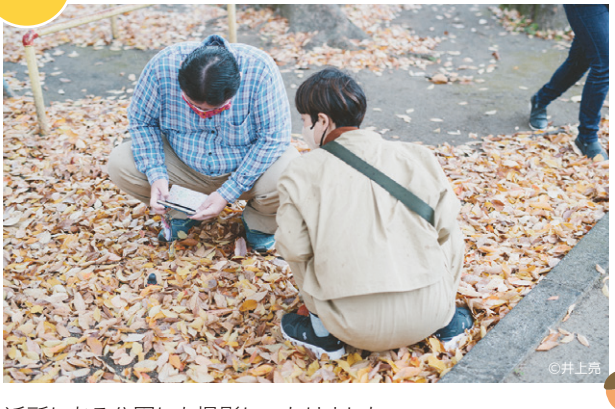
1日目 11/1(火) 10:30〜12:00　参加者 11名

金子さんが用意したアイテムや、施設内にある好きなものを撮影。写真をプロジェクターに映して感想を交換しました。

2日目 11/15(火) 10:30〜12:00　参加者 7名

赤と緑の色を見つける、というテーマを設定し、
施設内で見つけたものを撮りました。

3日目 11/29(火) 10:30〜12:00／13:00〜14:00　参加者 10名



近所にある公園にも撮影にでかけました。
最後は印刷した写真を壁に飾り、
みんなで鑑賞しました。

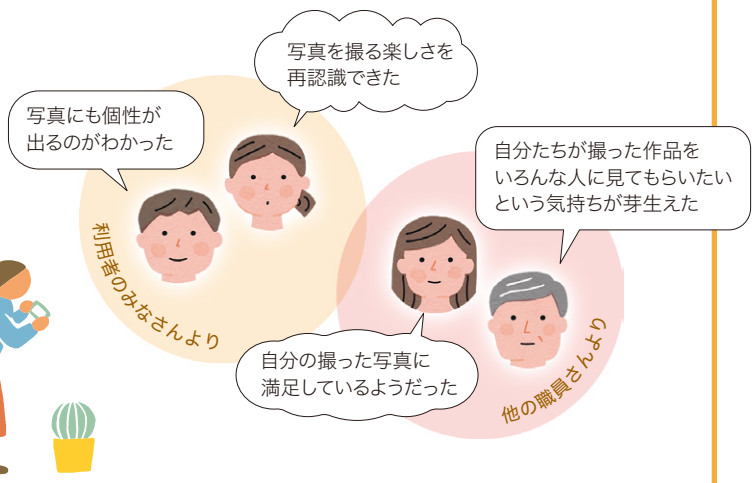
実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

外部講師を呼んで活動するということが参加者のモチベーションを上げていたと思います。職員が「写真を撮ろう！」と声をかけても今回ようにはいかなかったと思います。
今回の写真ワークショップを通じて、気軽に自己表現ができるのだということを利用者のみなさんは実感したようです。それぞれが撮った写真をお互いに鑑賞しあうことで利用者間の理解が深まったようにも思います。

山田龍（やまだ・りょう）

精神保健福祉士として神奈川県内の医療機関、行政・教育機関、福祉サービス事業所等の勤務を経て、現在はNPO法人けやきの会にて管理職を務める。特技のけん玉を活かし、自称「けん玉ソーシャルワーカー」として地域づくりを目指す。



アーティストからのコメント

写真だったら興味があると言ってくださった参加者の方がいたことと、写真は何度でも撮り直せるからとっつきやすいのかもしれないという職員さんのお話が印象的でした。参加者のみなさんそれぞれに面白い視点があり、回を重ねるごとによりその人らしい写真を見ることができました。撮るきっかけになったエピソードを聞いたり誰かの写真に興味を持ったりと、写真を介してコミュニケーションが生まれたことが嬉しかったです。

金子愛帆（かねこ・まなほ）　https://kanekomanaho.tumblr.com/

1989年生まれ。18歳から独学で写真を撮り始め、大学卒業後からフリーのカメラマンとして活動。同時にダンサーとしても活動しており、さまざまな振付家の作品に出演している。撮影の仕事は舞台やイベントなどの記録写真のほか、家族写真、企業紹介、商品紹介など多岐に渡る。

まとめ

ふだん写真を撮り慣れていない人も、金子さんたちに「ここがいいね」とコメントをもらい、他の人の写真も見るうちに、どんどん気軽にシャッターを切るようになっていました。写真を見合う時間では、撮影した時の気持ちや、そこにまつわる思い出を話す人もいて、写真をとおしてその人が見ている世界を垣間見ることができたように思います。飾った写真はしばらくそのままにして、今回参加しなかった人も見てくださいました。さらに地域に開いた写真展もできるのでは、と構想がふくらみました。

リエゾン笠間×中村大地

演劇 DRAMA

「ひとりの物語に耳をかたむける」

- 期間：2023年2月1日(水)　● 時間：13:30〜17:00　● 参加者：1名
- 対象：身体障がいのある成人　● アーティスト：中村大地（作家・演出家）
- 対象施設名：障害者支援施設 リエゾン笠間　● 運営法人名：社会福祉法人同愛会　● 施設種別：障害者支援施設
- 住所：神奈川県横浜市栄区笠間3-10-1　● URL：https://liaison-kasama.com

リエゾン笠間は、横浜市栄区にある障害者支援施設です。主に身体障がいのある20〜70代の人が50名ほどが生活するほか、自宅やグループホームから通所して創作・余暇活動に取り組む方もいます。脳疾患などによる中途障がいがある人も多く、最近では障がいを持つ前の生活について職員さんがお話をうかがい、改めてその人を知ることにも力を入れています。

今回は、一人の利用者さんのお話から物語を立ち上げ、その人の生活に関わる職員のみなさんと共有することで日々の関わりにつなげられればと考え、作家・演出家の中村大地さんにご一緒していただきました。

当日の様子

ご本人が暮らす入所棟のお部屋に中村さんといっしょに訪ね、幼少期からリエゾン笠間に来るまでのさまざまなエピソードをうかがいました。その時々の楽しかったこと、悲しかったこと、好きだったこと。どんな人生を歩んできたのか、うかがうことができました。冗談も交えて、和やかな時間でした。

実施を振り返って

福祉施設職員からのコメント

利用者の人生への支援を行っている私たちは、【今】を捉えようとすることが多いですが、成育歴はもちろん、ご本人が生きてきた中で感じたちょっとしたできごとや感情を知ることが、【今】につながると思っています。その中で今回、中村さんにご本人から直接聞き取っていただいた人生をお話にしていただくことで、ご本人が振り返るとともに、私たちが、利用者の人生を支援していることを実感する機会となりました。

小浜朋美（こはま・ともみ）

2010年に社会福祉法人同愛会に入職し、リエゾン笠間に所属。施設入所支援の部署での支援員を経て、現在は生活介護（通所）の部署での取りまとめと、相談支援専門員として計画相談を担当。

アーティストからのコメント

まず、なによりも話を聞くことができて良かったです。それをどのようにある種戯曲というパッケージにすべきか、思い悩みました。今回出した答えが最適だったのかわからないのですが、戯曲というメディアは声に出されることを望んでいるし、それを聞く人がいることではじめて機能する部分もあります。戯曲が紐解かれる場を通じてまた、対話が生まれるような、そのきっかけとしてテキストが機能すればありがたいです。

中村大地（なかむら・だいち）　https://yaneuraheights.net/（屋根裏ハイツ）

1991年東京都生まれ。東北大学文学部卒。在学中に劇団「屋根裏ハイツ」を旗揚げし、8年間仙台を拠点に活動。2018年より東京に在住。人が生き抜くために必要な「役立つ演劇」を志向する。
舞台音響家としても精力的に活動。一般社団法人NOOKメンバー。

まとめ

一人に焦点をあてて、物語の力でその人を捉え、関わる人たちと共有するという試みでした。さまざまな事情により、お話をうかがう機会は1回のみとなりましたが、お話しいただいた内容は中村さんに簡単な戯曲のようなかたちでテキスト化していただき、後日ご本人にお渡ししました。ご本人にはもちろん、職員のみなさんにも読んでいただき、違った側面からその人のことを捉え直すきっかけとなればと思います。

支える

ここでは、障がいのある人の芸術文化活動を支援するコーディネーター育成に関する取組みをご紹介します。
今回は「表現の見つけ方、広げ方」をテーマに、日ごろ障がいのある方の表現の近くにいるゲストと一緒に、その表現をどのようにすくいあげ、周りの人や地域との関わりにつなげていったらよいのか考える機会としました。全3回のうち、1回目はオンラインで、ほかは対面で各会場に集まっていただき開催しました。参加者同士の交流も生まれていました。また、年度末には事業報告会をオンラインで行いました。

勉強会

報告会

第1回　福祉施設での表現活動を豊かにするために

ゲスト　鈴木励滋（生活介護事業所カプカプ）

パネリスト　浦郷大佑（第2まどか）、佐藤功気（地域活動支援センター ほわほわ）、清水真帆（ミコミコカンパニー）
羽田航（サポートセンター連）、水野智也・渡辺由香（障害者地域活動ホームあさひ）

公開日：2022年9月7日（水）～9月14日（水）　開催形態：オンラインでの動画公開　申込者数：143名
収録場所：障害者地域活動ホームあさひ（神奈川県横浜市旭区白根4-6-3）　撮影・動画編集・整音：柏木賢和　ジングル制作：西井夕紀子

◆顔が見える地域福祉の連携づくり

第1回目の勉強会では、横浜市旭区内の福祉施設にファシリテーターとしてアーティストを招き、それぞれの施設の状況に合わせたワークショップ（以下、WS）をコーディネートした生活介護事業所カプカプ所長・鈴木励滋さんと、WS参加施設のみなさんにお集まりいただきました。日々の関わりのなかに表現活動を取り入れることで広がる可能性について、お話を伺いました。

前半は、鈴木さんに取り組みを始めたきっかけや、どのようなことを実現しようとしていたのか、お話しいただきました。2007年に旭区の地域自立支援協議会が発足し、そのなかで日中活動支援に取り組む事業所が集まる「日中連絡会」ができました。当初は障がい福祉内でのネットワークでしたが、2011年に旭区内で起きた親子の孤立死をきっかけに地域の他職種との連携が進み、少しずつ顔の見える関係が広がっていきました。
そうしたなかで、2016年に相模原市の津久井やまゆり園事件が起こります。この事件を受け、連絡会では「一人ひとりを肯定するためのネットワーク」を意識するようになりました。各事業所がそれぞれのメンバーの面白いところを紹介する「自慢の有名人」という企画を実施するなど、一人ひとりが肯定され、好きなことを存分に表現して地域の人に知ってもらう、という試みを続けていきました。

◆ワークショップに対する期待と発見

この「一人ひとりを肯定する」ということは、鈴木さんがこれまでカプカプでWSを実践してきた経験が大きく影響しています。WSの魅力について「先生と生徒のような関係ではなく、お互いに影響し合う場ができる。そしてアーティストは、一人ひとりの違いに気づき、それを楽しむ感覚を磨いていく力がある」と鈴木さんは話します。作品ではなく制作過程を重視し、それぞれが存分に自己表現をして日常や人生、周りの人との関係を豊かにしていく。WSにおいては、そのような「存在肯定形のアート」が可能なのではないかと考えています。こうした実感から障がい福祉の現場にWSを広めたいと考えていたときに、WAM（（独）福祉医療機構）助成事業に採択され「障害福祉施設におけるアーティストとのワークショップ定着事業」が始まりました。日中連絡会で培ったつながりを活かして声をかけ、6つの事業所で“お試しワークショップ”を実施することになりました。

初めてのWS、コロナ禍での開催など不安要素も多いなかでしたが、多くの気づきがあったといいます。「コロナ禍で少なくなっていた、新しいことに触れる体験を通して、利用者も職員も新たな一面が見えた」と話すのは、地域活動支援センターほわほわの佐藤さん。また、活動ホームあさひの渡辺さんは「自分たちもアーティストが来ることにワクワクした。」、ミコミコカンパニーの清水さんも「はじめは

“上手に、きれいに”というイメージがあったが、それだけがWSではないと知った」と感じたことを教えていただきました。また、WSで得た気づきが日常の場に活きることもありました。サポートセンター連の羽田さんは「その人の表現方法に気付き、日々の関わり方が広がった」、活動ホームあさひの水野さんは「その人の良さに目を向ける感性を養うことにつながった」と話します。参加したメンバーだけではなく、職員の方々にとっても楽しみや気づきがあるなど、豊かな時間となっていたことが見えてきました。

◆活動を続けるために必要なこと

WSを通して多くの発見がありましたが、取組みを継続していくことは容易ではありません。みなさんから大きな課題として「財源・予算」が挙げられましたが、そのためにはWSで起きたことを可視化し、周囲から共感を得ていくことの重要性が語られました。羽田さんは「企画段階で緻密に言語化して書面をつくり、施設内の理解を得ようと試みた」と、具体的な働きかけをし、来年度も自施設の取組みとしてWSを続けることになりました。

アーティストや、今回の鈴木さんが務めたようなコーディネーターといった、外部から関わる存在も大切です。「アーティストは自分たちと別の視点から、実践のなかで一緒に気づきを交換できる存在。もっと気軽な関係が築けるとよい」と話す第2まどかの浦郷さん。活動ホームあさひの水野さんからは、「WSの振り返りもファシリテーターのような第三者がいてくれることで、スタッフの研修や学ぶ機会にもなった」とありました。

神奈川県は都心に近いこともあり、アーティストや福祉事業所の数も多いという特徴があります。しかし、お互いの活動が結びつくためには、福祉側にはアートの良さを、アーティスト側には障がい福祉と関わることの面白さを伝え、双方をつなげる存在が必要です。鈴木さんは「支援センターをはじめ、文化施設にもアートの専門家としてコーディネーターを担ってもらえたら」と話します。わたしたちも芸術文化と福祉のさまざまな地域資源を活かして連携しながら、より豊かな機会と場を増やしていきたいと感じました。

鈴木励滋（すずき・れいじ）
1997年より現職を務める。『生きるための試行エイブル・アートの実験』（フィルムアート社、2010年）に寄稿するほか、演劇に関する批評や記事を『ユリイカ』や、劇団ハイバイ、劇団サンプルのパンフレットなどに執筆。

浦郷大佑（うらごう・だいすけ）
1985年神奈川県出身。大学卒業後、民間企業を経て2013年に社会福祉法人夢２１福祉会まどか工房に入職。19年より同施設のサービス管理責任者。事業再編により22年４月より「第２まどか」の所属となる。

佐藤功気（さとう・こうき）
2012年社会福祉法人横浜共生会に入職。小規模ユニット制を採用する、障害者支援施設「横浜らいず」の生活支援員を勤める。14年より地域活動支援センター「ほわほわ」の日中支援員として経験を積み、17年より所長に就任。

清水真帆（しみず・まほ）
2020年に入職、毎日メンバーさんと楽しく活動している。ミコミコではお菓子やドリンク（テイクアウトのみ）、自主製品の販売を行っている。SNSでは、ミニマルシェ等イベント情報や、日々の活動の様子を更新している。

羽田航（はだ・わたる）
1987年山梨県出身。大学卒業後から現職。十数年、福祉現場の仕事経験しかない事が自分の視野の狭さに繋がらないように日々いろいろなものに興味を持ち、何かしらの形で自分の現場に取り入れる事を常に考えている。

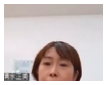
水野智也（みずの・ともや）
高校卒業後、横浜の福祉系専門学校に通う。学校の実習先でのつながりをきっかけに、現在の職場にてボランティアを経験し、そのまま正規職員になる。
1996年より所長に就任し、現在に至る。

渡辺由香（わたなべ・ゆか）
2001年にアルバイトとして入職。
その後常勤の日中活動支援員になり、サービス管理責任者として10年近く利用者の個別支援計画を管理する。現在は、施設内のグループのひとつ「第３あさひの家」で主任を務める。

オンライン交流会

日時：2023年9月12日（月）17時30分～18時30分　開催形態：オンライン会議システムZoomを使用　参加者：15名

第1回勉強会の感想や質問をゲストや参加者同士でやりとりする機会として、オンライン交流会を行ないました。福祉施設職員や当事者のご家族などが参加し、活動に取り入れる際のヒントや障がいのある人がアートに触れることの意義について、話が深まりました。



第2回　生まれてきた表現をみんなに見てもらうには

ゲスト　中畝常雄（ココロはずむアート展 実行委員）　大井志津枝（横浜市桂台地域ケアプラザ 地域交流コーディネーター）

開催日時：2022年10月7日（金）16：00〜18：00　開催形態：対面開催　場所：横浜市桂台地域ケアプラザ 多目的ホール（横浜市栄区桂台中4-5）　参加者数：14名

中畝常雄（なかうね・つねお）
1976年東京芸術大学大学院日本画修了、模写や修復に携わる。2011年より横浜市北部3区の障がい者施設を会場とした巡回展「ココロはずむアート展」を開催。自身も個展などを開催、絵画教室講師も務めている。

大井志津枝（おおい・しづえ）
2013年桂台地域ケアプラザ入職。地域の方々が感じている福祉の課題を一緒に考えたり、居場所づくり、仲間づくりを主な仕事としている。最近では障がい理解の為の啓発も力を入れている。

◆展示をとおして障がいのある人のことを知ってほしい

絵などの表現からは、言葉以上にその人らしさが伝わることもあります。周りにいる人や地域に向けて、作品としてその人の表現を伝えたいと思ったときに、どのような展示の工夫があるでしょうか。この回では、横浜市独自の地域の福祉拠点である地域ケアプラザで、地域交流コーディネーターとして障がいのある人の作品展を地域の方に見てもらうにはどういたらよいか悩んでいる大井さんのお話をきっかけに、参加者のみなさんと展示について考える機会としました。展示については、横浜市内の福祉施設での展覧会に関わる中畝常雄さんにアドバイスをいただきました。

大井さんが所属する桂台地域ケアプラザは、障がいのある人が活動する施設と合築になっています。そこで生まれるアート作品を地域の人にもっと見てもらおうと、ケアプラザを会場に作品展を開くといった試みを重ねています。一方、中畝さんが横浜市北部にある福祉施設に呼びかけて開催している「ココロはずむアート展」では、毎年100名程の障がいのある人が出展しています。ココロはずむアート展では、作品を描いた人のことを紹介する「作家カード」を制作したり、

作家に会場で絵を描いてもらうなど障がいのある人のことを知ってもらう機会も作っています。

◆作品の魅力を伝えるためには

展示の話題に入る前に、飾る作品を参加者のみなさんに作っていただきました。自分の顔に画用紙をあてて、髪の毛や顔の輪郭をなぞったら、はさみで切ります。色画用紙で服も作り自分の「分身」が完成しました。会の最後にケアプラザの壁にみんなで貼ります。

手を動かしたあと、中畝さんがふだん展示をするときに取り入れている材料や工夫を教えていただきました。「立派な額に入れると持ち運びや施設内に飾るのが大変。額を使わずに、作品を傷めないが美しく見せる方法を模索している」と実際に使用している、空き箱や段ボールを使った額の作り方を実演してくださいました。さらに背景に色画用紙や、果物の緩衝材に使われるネットなどを使って作品を引き立てるなど、身近な材料を使ったさまざまな展示方法のヒントをいただきました。

最後に先ほどつくった「分身」を、みなさんで配置を考えながら壁に貼りました。作品を囲みながら、参加者のひとりが「展示は、飾ることだけではなく、作品をとおしてなにを見せるのか、なのでは」と感じたことを共有してくださいました。「職員さんなど、作者の身近にいる人がまずおもしろいと思わなければ、周りにも魅力は伝わらない。作品を見ることで作者に出会ったり、感じたことをやりとりする対話が始まるといいと思うし、そういう機会をつくりたい」と中畝さん。展示をきっかけに生まれるコミュニケーションの豊かさと可能性を感じます。展示の手法だけではなく、「展示とはなにか」を考える時間となりました。

第3回　ものづくりの楽しみ方を体験する

ゲスト　ドゥイ（造形ユニット）

開催日時：2022年11月7日（月）15：00〜17：00　開催形態：対面開催　場所：クアーズテック秦野カルチャーホール（秦野市平沢82）　参加者数：22名

ドゥイ

小野亜斗子（おの・あとこ）と轟岳（とどろき・がく）による造形ユニット。横浜の「ドゥイの実験室」にてこども造形教室をひらく他、各地でワークショップを実施。参加者のひらめきを大切に、「クリエイティブな遊びの時間」を研究している。

◆遊びを発見していく、創作ワークショップ

障がいのある人と創作活動を始めようと思ったときに、どんなことをきっかけにしたらよいか、悩まれている方の声を聞くことがあります。この回では、五感を使って楽しむことや一人ひとりが持つひらめきを大切に「クリエイティブな遊びの時間」を探求する造形ユニット・ドゥイさんをお招きして、ものづくりを楽しみ、つくることを通した関わりの豊かさを参加者のみなさんと体験していただきました。

参加者のみなさんには5つのテーブルに分かれて座っていただき、各テーブルには画用紙とマスキングテープ、はさみとのりを用意しました。ドゥイの小野亜斗子さん、轟岳さんから自己紹介のなかで「ふだん障がいのある人や子どもたちに向けて、作り方を教えるのではなく、この素材でなにができるか、どういう変化をしていくのが面白いのか、遊びを発見していくようなワークショップをしています」とあったあと、さっそく「では、机の上にあるものでなにかつくってみましょう」。戸惑っていたのも束の間、だれかが画用紙をちぎったり丸めたりし始めると、マスキングテープを絵を描くように紙に貼ったり、帽子をつくったりと、どんどん参加者のみなさんの手が動いていきました。

◆試みの中で生まれる豊かな変化を楽しむ

そうしているうちに、ドゥイのお二人がいつのまにかマスキングテープを壁や床に貼り始めていました。机と机、壁と天井、部屋にテープを張りめぐらせていきます。頭上に伸びるテープに気づいた参加者が、いま作った紙の作品をくっつけました。途中で小野さんが「アルミホイルもおもしろい素材です」と材料に加え、帽子、リボン、スリッパなどを作ってみせると、さっそく参加者も思い思いのかたちを作っていきます。ひとつの作品をつくることに没頭する人もいれば、お互いがつくったものに手を加えていきどんどん変化していくゾーンもありました。「ふだんからセッションするようにワークショップができたらいいなと思っている。」という轟さんの言葉どおり、素材や空間、周りにいるひとと関わりあいながら、かたちを変えていく風景がそこにありました。

後半は、テーブルごとに感想やふだんの自身の活動について話をしたあと、全体で質疑応答の時間をつくりました。「扱いやすい素材、材料はほかにどんなものがあるのか」「興味をもってもらうきっかけづくりの工夫を教えてほしい」など、それぞれの現場に取り入れるためのヒントに関する質問があり、ドゥイさんのこれまでの経験の中からお答えいただきました。

素材やものを介して目の前にいる人と、さまざまな関わりを試みる。そこで生まれる変化や発見の豊かさに気づく時間となりました。
参加者それぞれのなかに、ものづくりを楽しむ気持ちが生まれていたのではないかと思います。

オンライン報告会

「地域とともに考える障がい福祉と芸術文化」

開催形態：ウェブサイトでの動画公開　公開日：2023年3月17日（金）～3月31日（金）　申込者数：55名　整音・編集：柏木賢和

この報告会では、今年度の事業についてご紹介するとともに、さらに「地域」の視点から障がいのある人の芸術文化活動について考えを深める機会としました。今回は、動画公開によるオンライン開催としました。

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター事業報告

今年度の活動報告と、福祉施設で行なった芸術家によるワークショップのうち、今年度公募に手を挙げて下さった3つの施設での取組みについてご紹介しました。福祉施設職員と芸術家をゲストにお招きし、ワークショップで起こっていたことを振り返りながら、それぞれから見た参加者の変化や、自身が得た気づきについてお話しいただきました。

飛行船でのダンスの取組み

収録場所　オンライン会議システムZoomを使用

ゲスト　渡邉皇太（生活介護事業所 飛行船）
上村なおか（ダンサー・振付家）

※取組みの詳細はP16～17をご覧ください。

くれよんでのダンスの取組み

収録場所　オンライン会議システムZoomを使用

ゲスト　井上久美子（児童デイサービス くれよん）
北川結（ダンサー・振付家・イラストレーター）

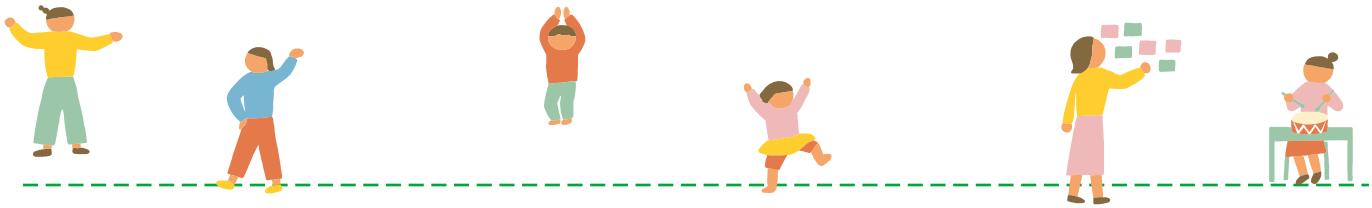
※取組みの詳細はP18～19をご覧ください。

きたのばでの音楽の取組み

収録場所　オンライン会議システムZoomを使用

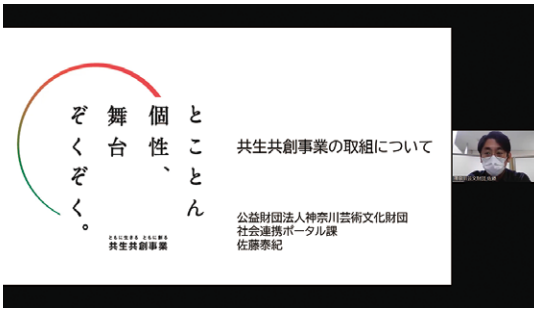
ゲスト　鹿野絵莉子（地域活動支援センター きたのば）
西井夕紀子（作曲家）

※取組みの詳細はP20～21をご覧ください。



神奈川県における関連事業のご紹介

神奈川県では神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターのほかにも、障がい者の芸術文化活動に関する事業を実施しています。今回は2つの事業について紹介していただきました。



共生共創事業
（公益財団法人 神奈川芸術文化財団）

収録場所　オンライン会議システムZoomを使用

ともいきアートサポート事業
（神奈川県共生推進本部室）

収録場所　オンライン会議システムZoomを使用

〈 事業報告ゲストプロフィール 〉

渡邉皇太
（わたなべ・こうた）
→P.17参照

上村なおか
（うえむら・なおか）
→P.17参照

井上久美子
（いのうえ・くみこ）
→P.19参照

北川結
（きたがわ・ゆう）
→P.19参照

鹿野絵莉子
（しかの・えりこ）
→P.21参照

西井夕紀子
（にしい・ゆきこ）
→P.21参照

〈 神奈川県における関連事業 〉

共生共創事業（きょうせいきょうそうじぎょう）
https://kyosei-kyoso.jp/
「ともに生きる社会かながわ憲章」の実現に寄与するため、「ともに生きる　ともに創る」を目標に、年齢や障がいなどにかかわらず、子どもから大人まで全ての人が、舞台芸術に参加し楽しめる事業を実施している。

ともいきアートサポート事業
https://www.pref.kanagawa.jp/docs/m8u/tomoikiart.html
「ともに生きる社会かながわ憲章」の理念に基づき、障がいの程度や状態にかかわらず誰もが芸術文化を鑑賞、創作、発表する機会の創出や環境整備を行い、障がい者自ら楽しむための取組みを推進することにより、共生社会の実現を図っている。

今年度の事業を振り返って

最後に、今年度の取り組みを「つなぐ」「つくる」「支える」の3つの柱を通して振り返るとともに、今後の展望について考えます。

	成　果	課　題
つなぐ	相談内容の中でも特に多い、創造、交流、発表に関する情報を届けるために「神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターだより」をウェブサイト、メーリングリストにて発行しました。実際に創造や発表の機会につながったという方もいらっしゃいました。 アンケート調査をとおして、福祉施設での芸術文化活動を行うにあたって、外部との連携が求められていることが分かりました。	障がいのある人や障がい福祉関係者が芸術文化活動を充実させたいと思ったときに、芸術文化や生涯学習など他の分野と手を結ぶには、ノウハウや情報がまだまだ足りていないと感じています。支援センターとしても、さまざまな分野との情報交換の機会をつくっていきたいと思います。
つくる	今年度は、これまで支援センターが訪れる機会がなかった障害児通所支援事業所でワークショップを行いました。土曜日の余暇の過ごし方やきょうだい児といっしょに参加できる機会など、新たなニーズに気づく機会となりました。また、地域の文化施設などを会場として活用することで、実施後も自施設の活動につなげるきっかけとなったのではないかと思います。	ワークショップ実施をとおして障がいのある人にとっての芸術文化活動の意義が見えてくるとともに、継続した取組みを行うための方法が課題となっています。他の福祉施設や地域の文化施設、自治体などとの連携の可能性を探りながら、福祉施設における芸術文化活動のよりよいあり方について考えていきたいと思います。
支える	支援センターがスタートして初めて、対面で講座を行うことができました。参加者同士で対話する時間を持つことで、地域や分野をまたいだ交流が生まれていました。また、ふだん障がいのある人との創作の現場にいるゲストのお話をうかがうことで、自分たちの活動に取り入れるヒントを見つけることができたのではないかと思います。	障がい福祉/芸術文化の分野をまたがった知見を深める場や、体験型の研修の機会が求められていることが感じられました。今後も対面やオンラインの場を活用して、さまざまな立場の人が交流・体験できる機会をつくっていきたいと思います。

今後の展望

県内の情報収集・発信

文化施設との連携、ネットワーク強化

今後も神奈川県内の障がいのある人の芸術文化活動に関する知見を蓄積し、
発信することでみなさんと共有していきます。
また、令和5年度に第2期を迎える障害者文化芸術活動推進基本計画では、文化施設などの連携強化について言及されています。
神奈川県障がい者芸術文化活動支援センターとしても、地域で芸術文化に触れる機会を作りたいと思った時に、
特に文化施設との連携が必要ではないかと考えています。
そのほか、さまざまな分野と協働しながら「つなぐ」「つくる」「支える」取り組みを続けていきます。

障害と身体を
めぐる旅2022

編集	田中真実、川村美紗	写真	金子愛帆（P.16〜27）
デザイン	水色デザイン	イラスト	熊本奈津子
印刷	共進印刷	テキスト	川村美紗、北沢理美

発行　神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター
〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15 横浜ＳＴビル地下１階
（ 認定NPO法人　ＳＴスポット横浜 地域連携事業部内 ）

発行日　2023年3月31日

本事業についての問い合わせ：神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

〒220-0004 神奈川県横浜市西区北幸1-11-15　横浜ＳＴビル地下１階
（ 認定NPO法人　ＳＴスポット横浜 地域連携事業部内 ）
TEL：045-325-0410　FAX：045-325-0414　MAIL：info@k-welfare.org
https:// k-welfare.org　神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター
https://www.stspot.jp　認定NPO法人 ＳＴスポット横浜

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター　令和4年度

STSpot Yokohama

神奈川県障がい者芸術文化活動支援センター

令和4年度